



長門夫妻「老老介護」の現。長門は介護と仕事の両立に悩んでいるという。このような男性介護者は多い。

「つらいですね。母が母でなくなっていくような気がするんです。昔はすく元気な活発で友達も多く、近所ではいち早く免許を取ってあちこちへドライブに行っていた母です。本当に「まさか」という思いでいっぱいなんです。介護をしなければいけない

ことは頭ではわかるけど、どうしたらいいかわからない。現実を見るのがいちばんつらいです」  
 昨年夏、夜中の2時に警察から母親を保護している連絡があった。母親はTシャツだけ着た状態で、道路脇にひっくりかえって起き上がれない状態だったという。「暑かったからぶらぶらしていた」と警察に語った母親だが、佐藤さんが駆け付けたところにはすでに自分のした行為を忘れていた。  
 まだ排泄の世話にはいたっていないが、佐藤さんは「そのとき、が来るのを恐れている。」「これからどんどんひどくなるのかと不安です。下の世話にも戸惑いがある。実際にそうになったら、誰かに頼むこと

になります。そのときが来るのが怖い」  
 72才の妻が認知症になった都内在住の田中誠さん(仮名・75才)もまず直面したのが排泄の処理だった。  
 「便のついたオムツは、燃えるゴミの日に出せないので、ビニールに包んで夜中にそっと捨てに行つた(田中さん)一日の終わりは好きな酒でしめくくっていた田中さんだが、介護を始めてからはまったく酔えなくなったという。大阪府高槻市に住む山田昭示さん(65才)はアルツハイマーを発症した妻の、るみさん(63才)とふたり暮らし。当初は入院治療していたが症状が悪化し、山田さんは55才のとき会社を辞めて在宅で介護することになった。苦

決した。苦労したのは、意外にも歯磨きだという。「妻は水で口をゆすいだり吐き出すこともできないので、歯磨き粉は使えない。それで自分で勝手に考えて毎晩1回だけ水で妻の歯磨きをしていま

「全然、やったことなかったから、包丁の使い方、だしの取り方、味付けには本当に苦労しました。結局、妻には宅配の弁当を頼んで私は閉店間際のスーパーで値引きされた350円の弁当を食べています」(菅田さん)

男性介護者は年々増えている

年	男性	女性
'01年	23.6%	76.4%
'04年	25.1%	74.9%
'07年	28.1%	71.9%

厚生労働省「国民生活基礎調査」より

しかし現在では、親や妻を介護する男性が急激に増えている。厚生労働省の「国民生活基礎調査」によると、'07年度における介護者のうち男性の割合は28.1%に達する。介護者の4人に1人以上が男性という状況で、すでに男性介護者は100万人を超えているとみられている。'06年に日本で初めて全国規模



芦田さんは、自分が作ると、油炒めばかりになってしまいうからと、弁当の配達を頼んでいる。

「家でコーヒー一杯もいれたことがなかったのに妻が倒れて、仕方なく家事全般をやるようになった」(70代男性)  
 「家事はおろか、銀行でのお金の出し入れや役所関係の手続きに戸惑う」(50代男性)  
 調査によると、家事で困っていることは炊事が最も多く、全体の4割以上を占めた。日々欠かせない食事の準備にも男性介護者は大きな苦労を感じている。  
 京都市在住の菅田豊実さん(60才)の妻・節子さん(58才)は5年前に若年性アルツハイマーと診断された。症状が進んだ7年から全面的な介護が必要になり、菅田さんが介護することになった。  
 「全然、やったことなかったから、包丁の使い方、だしの取り方、味付けには本当に苦労しました。結局、妻には宅配の弁当を頼んで私は閉店間際のスーパーで値引きされた350円の弁当を食べています」(菅田さん)

### 介護者の4人に1人以上が男性

80才を超えた母の異変に気づいたのは家族で経営していた酒店を閉めた1年後だった。コンロの火をつけたまま外出し、買い物に行くとなかなか帰ってこない。様子が変だと思ひ、病院に連れていったら認知症と診断された。それから7年間、新潟県内に住む原口真由美さん(仮名・58才)は、大声を上げ徘徊を繰り返す母の介護に追われる毎日だ。夫と両親の4人暮らしだが、ひとつ屋根の下に暮らす父も夫も遠巻きに見つめるばかり。  
 「ほとんど私ひとり介護しています。老いた父や、仕事で忙しい夫に求めるのは酷かもしれません。少しは手伝ってほしい。  
 正直いって、つらいなあ

介護をめぐると状況が大きく変わりは始めている。一昔前までは、介護の担い手の多くは女性だった。一般的に「家の中」のことは女性がするもの」という意識が強く、女性たちもごく自然に、家族が倒れたときには、献身的に身の回りの世話をしてきた。実際に'68年には男性介護者はわずか数%で女性が9割以上を占めていた。  
 介護をめぐると状況が大きく変わりは始めている。一昔前までは、介護の担い手の多くは女性だった。一般的に「家の中」のことは女性がするもの」という意識が強く、女性たちもごく自然に、家族が倒れたときには、献身的に身の回りの世話をしてきた。実際に'68年には男性介護者はわずか数%で女性が9割以上を占めていた。

いまでも仕事もやめ、夫の収入と父の年金を頼りに母の介護を続ける。精神安定剤とカウンセリングが欠かせなくなった。もはやいつダウンしてもおかしくない状態だ。原口さんがしみりとした口調でいう。  
 「いまは、どうにか頑張っていますけど、将来のことが不安で……。いまの夫の様子を見てみると、私が倒れてもとても介護なんてしてくれそうにない。別に無理にお願いしたいわけじゃないんです。でも、子供もいないので、じゃあ、どうするかと考える」と……  
 いま、原口さんと同じような不安を抱えている女性は少なくない。

正教授が解説する。  
 「男性介護者の増加は家族形態の変化が大きな要素です。三世同居がほぼなくなり、高齢夫婦の老老介護が多くなつた。独身の子供と暮らす老いた親も増えています。家族の規模が小さくなり男性も否応なく介護せざるを得なくなっているのです」  
 最近、俳優の長門裕之(75才)が認知症になった妻で女優の南田洋子(76才)を介護する姿が報じられた。長門が慣れない手つきで手作りのおにぎりとお汁を食べさせてあげているというところに「他人事ではない」と感じた人も多いいのでは

「間近で病んだ母親を見て、茫然とすることはかりでした」  
 とため息をつくのは母親(71才)が2年前から認知症を患う兵庫県在住の佐藤潤さん(仮名・44才)。実家でひとり暮らしを続ける母親のもとを2日に1回は訪れて介護を続ける。妻は4人の子育てに忙しく、介護は佐藤さんひとりで続けている。  
 記憶を維持できず、同じ質問を繰り返す母の姿に息が詰まると佐藤さんはいう。  
 突然、妻や親の介護をすることになった男性の多くは、さまざまな場面で挫折感を味わっている。  
 「間近で病んだ母親を見て、茫然とすることはかりでした」  
 とため息をつくのは母親(71才)が2年前から認知症を患う兵庫県在住の佐藤潤さん(仮名・44才)。実家でひとり暮らしを続ける母親のもとを2日に1回は訪れて介護を続ける。妻は4人の子育てに忙しく、介護は佐藤さんひとりで続けている。  
 記憶を維持できず、同じ質問を繰り返す母の姿に息が詰まると佐藤さんはいう。

